



TITLE:

「感情教育」における不動性

AUTHOR(S):

佐々木, 順子

CITATION:

佐々木, 順子. 「感情教育」における不動性. 仏文研究 1981, 10: 1-25

ISSUE DATE:

1981-01-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/137648>

RIGHT:

「感情教育」における不動性

佐々木 順子

1866年12月に書かれたと思われる手紙の中で、フロベールはジョルジュ・サンドに次のように述べている。

友人デュ・カンの新刊の小説「失われた力」《Les Forces perdues》を読んだところです。この小説は多くの面で、今私が書いているものに似ています。それは（彼の）非常に素朴なものですが、今日の若者たちには本当の化石となってしまった我々の世代についての正しい考えを抱かせる小説です。48年の反動は、フランス2つの世代のあいだに深淵をうがってしまったのです。

《vrais fossiles》となった世代を描くという意図のもとに創作された「感情教育」の中に、それでは《mouvement》「動き」は一体あるのだろうか。あるとしてそれは本物なのだろうか。《pratique》「行動」は「ブルジュワ」に墮することだと信じるフロベールは、《action》をどのようにとらえているだろうか。

更に、「不動性」についてはどうだろうか。「化石」と《immobilité》との関連性は大であるが、更に後者はフロベールに付きまとう「死」の強迫観念をも示している。「不動性」という、作者にとって重大な観念が作品の中ではどのように表現されているだろうか。

主に「行動性」に注目してこれらの点を検討してみたい。

I

1) フロベールは「感情教育」の中で、シャン・ド・マルスの競馬について次のように描写している。

遠くから見ると、その速力は大したものとは思えなかった。シャン・ド・マル

スの向うの端にいと、速力を緩めているようにさえ思われ、腹を地につけんばかりに、伸ばした足は曲げもしないで、ただ滑っているように思われた。が、たちまちこちらへ帰ってくるにつれ、しだいに体が大きくなってきた。目の前を通りすぎる時は、風を切り、地面はふるえ、小石が飛んできた。

(クラシック、ガルニエ版、p. 206)

2) あるいはロザネットの仮装舞踏会について、「フレデリックは最初光に目がくらんだ。彼は絹やビロード、裸の肩、緑の植物の蔭にかくれたオーケストラのかなでる音楽にあわせて、黄色の絹をはった壁のあいだをゆれ動いている色とりどりの塊しか眼につかなかった。」(p. 114)

3) このように、正確な速さの描写や、めまぐるしく旋回しているダンスの描写と共に、フロベールのこの作品には、「動き」を描いた場面が見られることは、Bernard Masson がその「水と夢」《L'Eau et les Rêves》(revue Europe 1969)で指摘するとおりである。

更に例を挙げれば、冒頭のパリからモンローまでのフレデリックの船旅にその例を見つけることができる。

ついに船は出た。倉庫や材木置場、工場の群がる両岸が、二条の幅広いリボンを巻きもどす(déroule)ように走りすぎていった。(filèrent, p.1)

セーヌ河の右岸に続いていた丘が次第に低くなり(s'abaissa)、対岸に、より近く、別の丘が姿を現わした。(surgit, p.2)

もう少し先に、四角な小塔のある尖った屋根の城が見えてきた。正面には花壇がひろがり、並木路が黒いアーチのような高いぼだい樹の下に入りこんでいた。(…)ちょうどこの時、石段の上のオレンジの植木箱のあいだに、若い男女が現われ、すぐに消え去った。(tout disparut, p.7-8)

走り去る両岸の景色は、一瞬船上の主人公を夢にさそい、永久に消え去っていく。

この冒頭の部分については、A・ティボーデ始め多くの批評家が、流れ去る水

のイメージが人生そのものだと指摘しているが、一方水のイメージと「動き」の比喩の関連性をも看過することはできない。

シャン・ド・マルスの競馬からの帰り、馬車に乗ったフレデリックは、様々な馬車がシャンゼリゼにあふれているのをながめて、大通りが「たてがみや衣服、人間の頭が波うっている大河に似」ていると思う。(p.209) 全速力で走る馬のたてがみは、他の箇所で「白い波のようにうねっ」といると形容されている。(p.101) パリの雑路についても同様、水のイメージで描写されている。

しかし、荷馬車や商店の軒が再び現れてきた。そして群衆に彼(フレデリック)は啞然となった。日曜日には特に、バステューユからマドレーヌ寺院まで、ほこりと絶え間ない騒音の中で、アスファルトの上はうねっている一つの巨大な波と化していた。(p.66)

この群衆の動きは、革命時にルーヴル宮におしよせるパリ市民の行動にも描かれている。

突然、ラ・マルセイエーズがひびき渡った。(…)それは民衆だった。彼らは階段に殺到し、目がまわるような人波となって、無帽の頭を、ヘルメット帽を、赤いふち無し帽、銃や肩を勢いよくゆすっているの、一人一人の人間は、このうごめく塊の中に消え去っていた。人波は、春分時の潮におしかえされた河のように、抵抗しようもない力でおされ、長いとどろきを伴って、休むことなくどんどん昇ってきた。(p.289-290)

9時頃、バステューユとシャトレに集合した群衆は、大通りへ逆流した。(…)しかし、雲が層をなして湧きおこってきた。嵐をはらんだ空に群衆は熱気をかりたてられ、大波のうねりのように、決心がつかないで旋回していた。(p.320)

突撃の太鼓がなっていた。鋭い叫び声や勝利の喊声が上がった。群衆は絶え間なくうずをまいていた。(p.288)

このように、水のイメージで表現された「動き」の描写は、「感情教育」の作品中、いたるところに見出される。

Ⅱ

ところで、こうした「動き」は本物なのだろうか。一連の「動き」を少し詳しく調べてみよう。

1) 冒頭の船旅の場面は、水の上を滑るように走る「動き」のあるものだった。

一方、この船の上にいる主人公は「舵のそばに、じっと動かなかった。」(p.1)

V. Brombert はこの点に関し、その「フロベールの小説」の中で、「船の動きは、不動性の別の形態にすぎない。船客は積極的な行為者ではない。しかし、ここでは消極性は二重になっている。すなわち、船自身は単に川の、避けることのできない流れをたどっているにすぎない。」と述べている。(p.141, *The Novels of Flaubert*, Princeton University Press) 注 1)

2) 第二部の初めで、遺産を相続したフレデリックは、ノジャンからパリへ馬車で帰ってくる。夜も走り続ける馬車は次のように描かれる。

しばしば、村を通りぬける時には、パン屋のかまどが火事のような光を投げていた。馬のばけものめいたシルエットが向いの家の壁を駆けていた。(p.101)

パリにもどったフレデリックはアルヌー夫人の住所を求めて町中をかけまわるが、ついにルジャンバルを見つけ、新しい住所を聞きだした主人公は、「酒場から、アルヌーの家に行った、温かい風に吹き上げられたように、夢の中で経験するようにいとも楽々と。」(p.108)

このように、実は影絵のように、あるいは夢の中で駆けているにすぎないのであった。また、この夢の中での「動き」を強調するために、《ombres》, 《glisser》などの言葉が使われている。

それから彼はゆっくりと街を逆にのぼっていった。(…)歩道のはしを、雨のさをもった人影 (ombres) がすべって行った。(glisser, p.24)

通行人たちは、影のように、泥の中を動きまわっていた。(p.373)

このように実際の行動を、夢の中の「動き」に移しかえる例は他にも挙げられる。トロンシェ街でアルヌー夫人を待っている間、町は革命で大騒ぎなのであるが、その喧騒も、「遠くまで見渡せる大通りのはるか奥を、見わけのつかない人の群が滑るようにすぎて行った。」（ p. 280 ）のように描写されているにすぎない。

フレデリックが、町で出会った男は、「兵士用の長い銃をもち、スリッパの爪先で夢遊病者のように、虎のように敏捷に走っていた。」（ p. 286 ）

革命の暴徒がとらえられている場面についても同様である。

時々、突如として砲声が聞こえてくると、彼ら（暴徒）は、これからみんな銃殺されるのだと思った。すると彼らは壁にとびついて、また元の場所へと落ちた。苦痛にぼけてしまって、悪夢の中に、いまわしい幻覚の中に生きているように思われた。（ p. 337 ）

「悪夢の中に生きているような」——これは後にロック氏が、囚人たちに銃を向ける残虐な行為を、夢の中の行為に変える伏線ということもできよう。

3) 更に登場人物たちの行動を見てみよう。

フレデリックはモントローからノジャンへ馬車で帰っていくが、その馬車の動きは、

馬車の動きに揺られて、半ばまぶたを閉じ、空の雲をながめつつ、彼は限りない夢想的な喜びにひたっていた。（ p. 9 ）

とあるように、夢想へと人を導く。この傾向は次の文章にも示されている。

彼（フレデリック）は、風の中にコントルダンスの旋律がぼんやりと、繰り返し聞こえるような気がした。歩く動作はこの酔い心地をいつまでも醒まさなかった。（ p. 77 ）

乗合馬車の前仕切りの奥の自分の席につき、いっせいに5頭の馬が駆け出して馬車が動きはじめると、彼は酔い心地にひたされていくのを感じた。（ p. 101 ）

森のもつ威厳が彼らの心をとらえていった。彼らは何時間も黙って、馬車のゆれるにまかせ、静かな酔い心地に麻痺したようになっていた。(p.327)

馬車の動きではないが、旋回についても同様である。

彼女たちはフレデリックのごく近くで旋回していたので、彼には額の汗が識別できた。——そしてこの次第にはげしくなっていく規則的で目のまわるような旋回運動は、彼を一種の陶醉へとさそった。(p.120)

このように「動き」は主人公を非現実 ≪ivresse≫ の世界へ連れていく。それでは、作中人物の行動はこの作品において、どのように扱われているだろうか。アルヌー氏は、実行家 (homme d'action) であるが、後にアルヌー夫人は「彼の悪癖というよりは、その行動すべてを非難したく思」うようになる。(p.171) 主人公フレデリックが行動にとりかかろうとする時、どのような事が起るだろうか。

しかしながら、彼は彼女 (アルヌー夫人) と一緒に暮らす幸福について何度も考えてみた。(…) そのためには、運命をすっかり覆えさなければならないだろう！ 行動にうつすことができず、神を呪い、卑怯者だと自分を責めながら、彼は牢の中の囚人のように、我が欲望の中で歩きまわっていた。(p.69-70)

欲望は、行動という出口には向わないか (「ある人々にとって行動は、欲望が強ければ強い程、不可能である。」(p.171) と作者自らわざわざ解説している)、あるいは「すりかえ」が起る。

動脈が強く打つにつれて、荒々しい行動をしてみたいという願望が彼をとらえていった。アメリカでわなを使う猟師になりたい、東洋でバシャにつかえたい、水夫になって船に乗りたいと思った。(p.93)

しかし、彼が実際にしたことは、デロリエに長い手紙を書き、自分の悲しみを伝えることに限られていた。

ヨーロッパ中が動揺していた。今こそ動きの中にとびこみ、おそらくはそれを

促すべき時機なのであった。(p. 299)

という行動の季節にフレデリックが望むのは、代議士の衣装であり、行動にかかろうとする時彼に嫌気をおこさせるのは、「知性クラブ」での人々の馬鹿馬鹿しいふるまいである。

更に興味深いのは、アルヌーとフレデリックがカルーセルの哨兵所ですごす場面である。

引き金をひきさえすればアルヌーは死ぬ、単なる事故死として片づけられようという時にフレデリックは、アルヌー夫人と過ごすことになるであろう幸福な未来のことをまず考える。

フレデリックは脚本家のように、この考え(引き金を引くこと)を発展させていた。突然彼にはこの考えが行動に変わるのもありえぬことではない、この行動に加担するだろう、それを望んでいるように思われた。すると非常にこわくなった。この苦悶のただ中で彼は快感めいたものを味わい、その中に次第にのめり込んでいった、おそろしげに不安が消えていくのを感じながら。(p. 316—317)

上述の文章においては、行動はマゾヒズムに転化し、願望はやはり行動におもむくことなく、自分の中に、夢想の中へと方向転換していくことになる。

4) 冒頭の部分に「川の曲り角にくる度に同じ蒼白いポプラ並木が見えた。」(p. 4)という一節があるが、船は進んでいるというより、同じ場所を旋回しているように思われる。

同様に、アルヌーは妻と愛人の間を往き来しているにすぎない。

かつてモンマルトル通りにあった飾り戸棚のうち、一方は今やロザネットの食堂を、他方はアルヌー夫人の客間を飾っていた。この両家では食卓にでる器類も似ていたし、ビロードの帽子が安楽椅子の上に置きっぱなしのままで同じだった。そしてたくさんのちょっとした贈り物、火よけのついたて、箱、扇などが愛人のところから妻の家へ往ったり来たりしていた。何故ならアルヌーは平気で、一方にやっていたものをとり上げて、他方に与えるということをしばしば行っていたからである。(p. 145)

そのことは、銀の止め金のついた小箱の運命に象徴されている。ショワズール街での初めての晩さんの時フレデリックが見た、アルヌーから夫人への贈り物の小箱は、後にロザネットの家へ行き、再びアルヌー夫人の所へ戻ってきたが、競売で売られてしまう。

他方、フレデリック自身が、ダンブルーズ夫人とロザネットの2人の愛人のあいだでためらっている。

まもなく、こうした嘘をつくのが彼にはおもしろくなってきた。彼は一方に誓ったばかりの言葉を他方にくりかえした。同じような花束をそれぞれに送り、同時に手紙を書き、2人を比較してみた。(p. 388)

後に自分の行動を顧みて、フレデリック自身が《ligne droite》(p. 426)が欠けていたと要約するに至る。余談ながら、フロベールの歴史観もこの《circularité》をのがれていないように思われる。人間のおろかしさ (bêtise humaine) は永久に変わらないとする悲観的な人生観をもつフロベールは、社会主義者の説の中にも、例えば作品中のセネカルであるが、中世のギルドを理想とする考えを鋭く見ぬいている。「ギルドは少くとも、徒弟の数を制限して職工の過剰をふせいでいた。そして祭や団旗によって友愛の感情はよく保たれていた。」(p. 139)

また、1868年10月17日、ジョルジュ・サンド宛の手紙で次のように述べている。

48年の事件で私がおそれたのは、その全く自然な源が大革命にあるということです。その大革命は、結局のところ、中世から分離されてはいないのです。私はマラーの作品の中にブルードンの思想をそっくり見つけました。私は断言してもいいですが、彼の思想は、あのカトリック同盟(リーグ)の説教師たちの文章の中にもみつけることができますよ。

初稿「感情教育」における「彼(ジュール)は、同じような事柄に対して同じような考えが、同じような事実を前にして同じような感覚がくりかえし現われるのに気づいた。」(第26章)という一節も、明らかにこの考えを表明している。

5) 上述の「どうどう巡り」(circularité)と同じく、行動性を間接的に否定するものに、行動の反復が挙げられる。それは習慣化し、機械的なものへと堕して

いく。

前述した「曲り角毎に同じ蒼白いポプラ並木が見えた。」(p.4) という、同じものの繰り返し、単調さは、船の歩みまで遅くするように思われる。「倦怠があたりぼんやりと拡がって、船の進行をゆるめているように思われた。」(p.4)

かくして月日は、同じような退屈さと身についた習慣を繰り返しているうちに、過ぎていった。彼はオデオン座のアーチの下で書店で仮綴本をめくり、カフェに「両世界評論」を読みに行き、コレージュ・ド・フランスの教室に入って一時間、中国語か経済学の講義を聞いた。毎週デロリエに長い手紙を書き、マルチノンと時々夕食を共にし、シジィ氏と何度か会った。(p.25)

「それから3ヶ月間の退屈な日々が始まった。」(p.64) 子供達が小犬を泥水の中で泳がせている風景さえ習慣になり、《immobile》な光景のひとつに変わってしまう。

学生たちが故郷へ帰ってしまったカルチェ・ラタンでは、歩道すれすれに下りてきて、フレデリックをふりむかせる乗合バスさえ、習慣と化している。(Un omnibus (…) le faisait se retourner. p.65)

一方、機械的な動きは、人形の比喻によって、より強調される。

「アルハンブラ」では人々が往き来し、動きまわっているが、「オーケストラの指揮者は、立って、機械的な動作で拍子をとっていた。」(p.71) 「デロリエは小柄な女を抱いて(…) カドリーユのまん中を、大きな操り人形みたいに動きまわっていた。」(同) 「知性クラブ」では、弁士が「機械のようにしゃべり続けていた。」(p.304) ルジャンパールの連れてきたバルセロナの愛国者は、「大きくおじぎをすると、自動人形のようにその銀色の眼をうごかした。」(p.309)

6) ところで「感情教育」に描かれる行動は、だしぬけに、突然行われる例が多い。

唐突なようでいて、実は細心に計画されている場合——モロー未亡人に「突然」借金の返済を要求しにやってくるロック氏(p.90)、デロリエは新聞の将来についてフレデリックに説明しながら、「次第に新聞の調子を上げていき、突然、同じ編集者で政治新聞に切りかえ、購読者に提供したい」と述べる(p.112)、アルヌー夫妻の家具が競売されている場に出かけたダンブルーズ夫人は、突然、「私、あの小箱を買いましょう。」といって、フレデリックを驚かせる(p.414)——まあ

るが、最も多い、本来の唐突さについて検討してみよう。

モンマルトルの店にアルヌー夫人が住んではいないと知ると、そのあたりに感じていた魅力が「突然」消えうせる例（p.41）、クレリュのアルヌー夫人にすげなく追い返され、汽車でパリに帰ってきたフレデリックは「一時間後、大通りを歩いていると、夕暮れのパリの陽気さが、突然、彼の旅行をはるか遠い過去へと追いやっ」てしまう例（p.200）、ロザネットの伝言を伝えにやってきたヴァトナ嬢が、テーブルの上のカルセル・ランプのあかりで、彼女の未知の部分がひき出されたかのように、「突然、この醜い、ひょうのようにしなやかにからだをくねらしている女を前にして、フレデリックは激しい情欲、獣的な肉欲を感じ」る例（p.256）、ダンブルーズ未亡人と会う回数が増すにつれて、「なんでもないこと、人物の、作品の評価について、突然、深いみぞが2人のあいだにあるのに気づく」例（p.390）など、心理的なものもあるが、行動の唐突さも重要である。

ダンブルーズ夫人の馬車は、突然、走り出す（p.21）、コーヒー店では、猫がシロップをなめようと、突然テーブルの上にとび上る（p.105）、ダンブルーズ氏の夜会で、マルチノンは、夫人の居間の戸口に、「突然、姿を現わ」し、立ち上った夫人に腕をかす（p.161）、決闘で気を失っていたシジィは、気がつくと「突然剣にとびつく」（p.230）、フランシャールの森では、カフェの給仕が、突然、現われる（p.323）、猟番や、ぼろ服の薪を背負った女たちが、突然、通りすぎる（p.325）、ダンブルーズ夫人はフレデリックの所へ「ある夜は、突然、夜会服で姿を現わした。」（p.374）、遺言状をさがすダンブルーズ未亡人は、「突然、するどい叫び声を上げて片すみへととんでいった。」（p.384）、ロザネットは、子供が死ぬと、突然、防腐処理をして、いつまでも手元においておきたいと言う（p.401）など、不動性にとらえられまいと、抵抗している作中人物の行動は、気紛れと思われそうな場合もある程、唐突で、断続的なものにならざるを得ない。アルヌーやロザネットの《légèreté》はその典型的なものである。

革命の場面についても、唐突さが見られる。

突然、ラ・マルセイユーズのリフレインがあたりに響きわたる（p.278）、フレデリックとロザネットが「コーマルタン街に入ろうとしていた時、突然、彼らのうしろで、大きな絹切れを引き裂く時のおとに似た物音がした。」（p.285）、蒼白い顔の若い男が、突然、小路から出てくる。（p.286）、デュサルディエの負傷を知り、ロザネットの反対にもかかわらず、フォンテンヌブローからパリへ帰ってきたフレデリックに「突然、見張り番が銃を斜めに差し出し、行く手をさえぎった。」

(p.333)、フレデリックが市長舎で、国民軍の兵士たちに酒をふるまっていた時、「突然、一斉射撃の音が聞こえたような気がした。酒盛りはやんだ。人々は見知らぬ男を、疑いの眼でながめた。」(p.335)

ところで、この唐突さは、*apparaitre*, *disparaitre* の使用によっても強調される。

シャン・ド・マルスの競馬場で、「100 歩ばかりはなれた所にいたミロール馬車から、一人の女があらわれた。」(*parut*, p.205)、フレデリックはアルヌー夫人かどうか確かめようとするが、シジィにつかまっている間に馬車は姿を消す。「ミロール馬車が再び現われた、アルヌー夫人だった。」(*reparut*, p.207)、ロザネットの侮辱に、「馬車は姿を消した。」(*disparut*, 同)

あるいは革命中、パリを歩きまわっていたフレデリックは「突然」3 歩先にダンブルズ氏を見つけるが、混雑しているので、話の途中で人波にひきはなされ、しばらくすると氏は「また姿を現わした。」(*reparut*, p.318)

このような例は、作品中至る所に見つけることができる。

Ⅲ

このように、この作品において、「行動」は呪われたものになっているか(アルヌーの行動)、自分では行動しているつもりでも実は、非現実性が強調されていたり、同じ所をぐるぐる回っているにすぎなかったり、行動性を否定される結果になっている。

あるいは、衝動に駆られていきあたりばつたりに行動するか、ロザネットの動作について、「作者は一連のスナップ写真のように、すばやい、連続したプランを使って作中人物の様々な態度を示している。それ故リズムは動きそのものの連続性によってというより、これら様々な姿勢のモンタージュによって創造される。」(p.203, *Sensations et Objets dans le Roman de Flaubert*, Armand Colin) と Pierre Danger が指摘するように、連続性が否定されている。

それでは「不動性」はどのようなになっているだろうか。

前述した P. Danger は、引用した書物の中で次のように述べている。

例えばロザネットの仮装舞踏会で、憑かれたような動きのうずの中で、騒ぎは、見物人に芸術的に作成された一枚の絵を提供するかのようになり、突然凝固する。

「そこで彼女はストーブの上のシャンパンのびんをとり、さし出されるコップに上から注ぎ込んだ。テーブルは長すぎたので、お客たち、特に女たちは彼女のそばに行き、つま先で立ったり、いすの横木にのったりしていた。一瞬、帽子や裸の肩、伸ばした腕、かがみ込む胸などのピラミッド状の集まりができた。」(p. 241, *Danger* の引用文については、ガルニエ版 p. 125)

このようなスナップ・ショットは、作中人物が何らかの光景に突然出くわす時にも見られる。

温室に入っていくと、噴水のそばのカラディウムの大きな葉の下に、デルマールが亜麻布をはった長いすに腹ばいになっていた。ロザネットは、彼のそばに坐り、男の髪に手をとおしていた。2人は見つめ合っていた。その時アルヌーがもう一方の戸口、鳥かごのある方から入ってきた。デルマールはとび上り、ふりかえりもせず、落着いた足どりで出ていった。(p. 123)

女中が現われた。第二の戸がひらいた。アルヌー夫人は暖炉のそばに腰かけていた。(…) ひざの上には3才ほどの男の子がいた。娘のほうは、今や母親と同じくらいの背丈になり、暖炉の他方に立っていた。」「アルヌーはとび上って、彼を抱きしめた。」(p. 108)

ついに三階にたどりつき、戸をおした。アルヌー夫人が鏡つきの衣装戸棚の前に一人きりでいた。半ばひらいた部屋着の腰ひもが腰にそって、たれていた。髪の前髪側そっくり右肩の上で黒く波うっていた。彼女は両腕をあげ、片手でまげをおさえ、他方の手でそこへピンをさそうとしていた。軽い叫び声をあげると、姿をけした。(p. 194)

このように、一瞬動きが凝固してしまう例は、G. Genetteがその「フロベールの沈黙」の中で指摘しているように、主人公たちが黙り込んでしまう場面にも見つけることができる。

Genette は、沈黙の時には、作中人物たちは、話をやめ、自然や自分たちの夢想の声に耳を傾ける、そしてこの会話と動きの中断は、作品それ自身の動きをも止めてしまうことになると述べ、この沈黙の例として次のものを挙げている。(p.237 Figures I)

フレデリックとルイズは「黙ってしまった。足元で砂を踏む音と、瀬音がきこえるばかりだった。」(p. 250) フレデリックとロザネットは「森のもつ威厳にとらえられていった。2人は何時間も黙ったまま、馬車にゆられ、静かな歓喜に酔い、無感覚になっていた。」(p. 327)あるいは「草原に腹ばいになり、向き合い、見つめ合っていた。自分の姿を求めて相手のひとみの奥をのぞき込み、堪能するとまぶたを半ばとじ、もう話はしなかった。」(p. 328) 註 2)

驚きや恐れあまり、動きを失う場合もある。

パリに帰ったフレデリックは「工芸美術」に何度か出かけ、アルヌー夫人に近づくと手だてではないかと思案するが、結局「何もしなかった、何もやってみようとは思わなかった——成功しないのではないかという恐れに身動きもできないで。」(p.23) おもいがけずフレデリックの姿を見てルイズは「叫び声をあげて立ち上った。他の人々は皆、動きまわっていた。彼女は立ったまま、身動きひとつしなかった。」(p. 242)アルヌー夫人は病気のウージェーヌが危機を脱した時、まだ信じられずに「腕をたらし、眼をすえて、石にでもなったように立ちつくしていた。」(p.283) 最後にアルヌー夫人が借りていた金を返済にや^りって来た時、フレデリックに今なお愛されているのを知り、一瞬動きを忘れてしまう。(p. 422) 終章で、デロリエとフレデリックは青春時代を回想する。「トルコ女」の家にでかけたフレデリックは「暑さのためか、未知な事柄に対する恐怖心からか(…)興奮してしまい、顔色が蒼ざめ、先へ進むことも何か言うこともできずにじっと立っていた。」(p. 427)

このように、舵のそばにじっとたたずむ描写で始まり、「先へ進むことも何か言うこともできずにじっとしていた」で終りになるのも、化石となった世代の描写という作者の意図と考えあわせると興味深い。

失望のため無気力になり、そのために動きを失う場合もある。

破産を知ったフレデリックはノジャンにとどまるが、「自分は死んだ人間も同然だと考え、もはや何かしようとは思わなかった。」(p. 92) ル・アーヴルの伯父を招いたが、「お前たちが結構にくらしていることが解って私は安心したよ。」と言いおいて去った後、モロー夫人は自分の企てが失敗したのを見て、「ひじかけ椅子に、頭をたれ、口びるを結んだまま、じっとしていた。」(p. 96)アルヌー夫人と一緒に暮らしたいという願望に悩まされながらも、行動にうつせないフレデリックは「何時間もじっと身動きもしないでいるか、涙にむせんだものだった。」(p. 70)

アルヌー夫妻がパリから姿を消した後、奔走したのが無駄に終わったことを知って「フレデリックは別のひじかけ椅子にすわり、身じろぎもせずアルヌー夫人のことを考えていた。」（ p. 407 ）

こうした「不動性」は彫像の比喩へと導く。

冒頭、モントロー号上のフレデリックは「アルバムをかかえ、舵のそばにじっと動かなかった。」（ p. 1 ）アルヌー夫人の新しい住所を知るために、「アレクサンドル」というカフェでルジャンバルが来るのを待っていた間、外では、雨が降るにもかかわらず「モスリンのカーテンのすき間から外を見ると、馬は木馬よりも動かず、じっとしていた。」（ p. 106 ）グランジュ＝バトリエール街の新しいロザネットの住居を訪れたフレデリックは、彼女が水ぎせるを吸う場面を目撃する。「彼女は長いすの上に、クッションをわきにかかえ、体を少しねじり、片膝は曲げ、他方の足は伸ばしたまま、じっと動かなかった。」（ p. 259 ）デュサルディエの負傷を知ったフレデリックはパリに引きかえすが、「四つ辻のまんなかには、馬にのった竜騎兵が一人、身動きもしなかった。」（ p. 334 ）革命時に、王宮の控えの間では「一人の少女が、自由の女神像のように、おそろしげに眼をみひらき、ひとかたまりの衣類の上に立ち、身じろぎもしなかった。」（ p. 291 ）デュサルディエは、「トルトーニの石段の上に一人の男——背が高いので遠くからすぐそれとわかるデュサルディエが、人像柱よりも身動きしないで立っていた。」（ p. 418 ）

ところで、彫像的な比喩につきまといわれている作中人物もある。

アルヌー夫人は、ほとんど動かない。初めてフレデリックが夫人に出合う時「彼女は同じ姿勢をとり続けていた。」「筋のおった鼻、あご、身体全体が青空を背景にして、くっきりと浮き出ている。」（ p. 5 ）名の日の祝いの際、サン・クルーにある別荘で「アルヌー夫人は、火事のような光を背に、大きな石に腰を下ろしていた。」（ p. 83 ）伯父の遺産を相続した後パリにもどったフレデリックは、ある日アルヌー夫人を訪ねる。「彼女は最初の日と同じ姿勢で、子供のシャツを縫っていた。」（ p. 134-35 ）クレリュにアルヌー夫人を追いかけたフレデリックに夫人は冷やかである。「暖炉の火はもう燃えていなかった。雨がはげしく窓ガラスをたたいていた。アルヌー夫人は身じろぎもしないで、ひじかけ椅子の腕に両手をのせていた。ボネットのひもがスフィンクスのバンドのようにたれていた。」（ p. 199 ）彼女の不動性は、スフィンクスの比喩で更に強調される。

歌手のデルマールは初めて「アルハンブラ」に登場した時、「ろうのように色の白い」(p. 73) 若者と形容されている。ロザネットの仮装舞踏会に現われた時は、「暖炉にもたれていた、片手を胸にあて、左足は前に、視線は宙に向け、頭布の上に金の月桂冠をかぶり、じっと動かなかった。」(p. 121)あるいは「しばしばロザネットは、彼女のうしろに身動きもせずに立っているデルマールをふりかえった。」(p. 124) この歌手は、ポーズが得意である。「知性クラブ」においても、この「現代の救世主」(p. 175)は「何か発言する機会をのがさなかった。もう何ひとつ言うことがなくなると、こぶしを腰に、他方の腕をチョッキの中に入れて身をそらし、ふいに横向きになって頭がよく見えるようにするのが手だった。すると、拍手が、部屋の奥の方にいるヴァトナ嬢の拍手が、なりひびいた。」(p. 302)

次第に、彫像になったかのように、動きが少なくなる登場人物もある。

革命家ルジャンバルの日課は次のように要約される。

朝8時にモンマルトルの丘を下って、ノートルダム・デ・ヴィクトワール街へ白ぶどう酒を飲みに行く。昼食のあとで玉突き数ゲームをやっていると3時になる。それからパノラマ小路の方へアプサントをのみに行く。アルヌーの店に立ち寄った後は、酒場ボルドレへ入って行き、ヴェルモットをのむ。それから妻のもとへは帰らないで、一人でガイヨン広場の小さなカフェで食事をするほうが多い。そこでは《家庭料理、ごくあっさりしたもの》を注文する。最後に別の撞球屋へ移って、夜中の12時、1時まで、ガス燈が消え、錠戸がおりて、へとへとになった店の主人が、帰ってくれと嘆願するまで、動こうとしない。(p. 39)

この機械的に動きまわる男は、破産の後パリに帰ったフレデリックがやっと捜しあてると、「玉突きをした後、酒場の奥でただ一人、ビール杯を前に、下をむいて何か考えこんでいた。」(p. 107) このルジャンバルは次第に口数も少なくなり、最後には「バステュー広場に面した小さなカフェに、一日中右奥の片すみに陣どり、建物の一部になってしまったかのように」身動きもしなくなってしまう。(p. 394)

アルヌーも初めは「時間がたつにつれて、アルヌーの仕事は増えていった。記事を分類し、手紙を開封し、費用を計算し、支払った。店でつちの音がするたびに、荷造りを監督して出て行き、それから仕事の続きをしにもどってくる。鉄ペンを紙の上に走らせながらも、冗談には応酬した。今夜は弁護士の家で夕食をし、明日はベルギーに出発する、と言った。」(p. 36)という忙しさだが、終り近くでは、宗

教用品を売ようになったアルヌーは、「カウンターで頭をたれてウトウト」するまでになっている。(p.395)

ところで V. Brombert は前述した「フロベールの小説」の中で、「サランボー」の ≪immobilité≫ について分析し、彫像的なポーズ、建築物にたとえた比喻、宝石類の描写が「不動性」に大いに寄与していると指摘しているが、「感情教育」についてはどうだろうか。(彫像の比喻については、すでに述べた。)

ロザネットは「しばしばフレデリックに、彼女が読んだ本で見つけた言葉の説明を求めたが、答を聞いてはいなかった、というのは、彼女は質問せめにながら、すぐに他の考えにと移っていったから。途方もなくはしゃいだ後には、子供じみた怒りが爆発した。かと思うと、暖炉の前の床にすわり、うなだれ、膝を抱いて考えにふけり、動作の鈍くなった蛇よりも動かなかった。」(p.144)

行動的というより、衝動的に行動するロザネットは、フォンテンヌブローの城を訪れた時も、「この何世紀にもわたる年月のにおいては、ミイラの防腐剤の香りのように、陰気で人の心を麻痺させ、ごく単純な頭にも何かを感じさせる。ロザネットはむやみにあくびをしつづけた。」(p.323) かびくさい過去よりは、池の鯉にパンくずをやる方を好む。自分の過去の生活について語るのも、この小旅行中、自然の中においてである。

この ≪sauvage≫ にとって、ロシアの貴公子が用意した家は、≪accablement≫ (p.295) しか感じさせない。その家というのは、宝石類、陶器、鉱物類で飾られ、重苦しい雰囲気満ちている。

暖炉には、鏡のかわりにピラミッド型の棚があり、段ごとに珍しいこつとう品のコレクションがのっていた。古い銀時計、ボヘミア、ガラスの細口花瓶、宝石でできたホック、硬玉のボタン、七宝類、シナの陶器人形、銀メッキの法衣を着たビザンス風の小さな聖母像。(p.258)

というように、宝石類が並び、しかも「青いじゆうたんの色、腰かけのらでんの反射、栗色の皮をはった壁の鹿子色の色調とともに、こういう品々は、金色のうすあかりの中にとけ込んでいた。」あるいは「部屋の隅々には、小さな台の上に、青銅の花瓶に花がこんもりと盛られ、あたりの空気を重くしていた。」(同、傍線筆者)

上流社会の人々に関しても、宝石類陶器への言及がある。

ダンブルーズ氏は「ガラスの眼より冷やかな青緑色の眼」をしている。(p.20) マルチノンは「セーヴル焼の陶器」に似ている。(p.236) ダンブルーズ氏の夜会で、夫人の部屋に集った女たちは、ハーレムをおもわせ、「髪の中で羽根飾りのようにふるえているダイヤモンドの白い輝き、胸の上にひろげられた点々と輝く宝石、顔に映えているやさしい真珠の光などが、金の指輪、レース、白粉、羽毛、小さな口の朱色、歯の真珠母色の反射とひとつに溶けあっていた。」(p.160, 傍線筆者) ダンブルーズ夫人は「めのう色の額」をしている。(p.161)

宝石類の比喩と共に、建築物の比喩も見られる。

馬車の往きかうシャンゼリゼの、雨に洗われ、輝いている木々は「緑色のかべのようにそびえていた。」(p.209)

フォンテンヌブローの森の中での、フレデリックとロザネットの散策の場面には、次のような一節がある。

真昼に、太陽は幅のひろい葉の上に垂直にさし、それらをきらめかせ、枝の先に銀のしずくをとまらせ、芝生にエメラルドの線を引き、金色の斑点を枯れ葉のしいところへつくっていた。頭を上げると、梢の間に空が見えた。とりわけて高い梢のいくつかは、家長か、帝王のような様子をしており、あるいは端が触れ合って、その長い幹とともに凱旋門をつくっているようだった。根元から斜にのびて、今にもたおれそうな円柱に似ているものもあった。(p.325, 傍線筆者) 註3)

このような不動性 ≪immobilité≫ は、次の凝固したような時間の中で、極限に達する。

樹木の種類が多く、そのため景色には変化があった。(…)ざらざらした巨木の柏は、けいれんしたように、地からのび出し、互いに抱きしめ合っている。その、トルソのように幹の上にしっかりおちつき、裸の腕で、絶望の叫び、荒々しい威嚇をかわし合っているさまは、怒りに佇立した巨人族を思わせた。(p.326, Titans immobilisés dans leur colère)

ところで、この「不動性」と関連して、眠り ≪dormir≫ への言及がしばしば見られる。

モントロー号の船上で、船客は「立って話をしているか、荷物の上にしゃがむか、あるいは隅の方で眠っていた。」(p.4) 夏休みのカルチェ・ラタンでは「人気の

ないカフェの奥では、レジ係の女が一杯入った水差のあいだであくびをしていた。」（ p. 65 ） ルジャンパールを探しまわっているフレデリックが雇った馬車の御者は、どしゃ降りにもかかわらず、「おおいをかぶって、うとうとしていた。」（ p. 106 ） シャンゼリゼの馬車列の中の「ラシャをはった座席のある大きな箱馬車には、金持ちの老婦人がのり、うとうとしていた。」（ p. 208 ） フォンテンヌブローへのがれたフレデリックとロザネットは「中庭の噴水の音を聞きながら寝入った。」（ p. 324 ） デュサルディエはフレデリックがやっとたどりつくと「屋根裏部屋で、あおむけに眠っていた。」（ p. 336 ） ダンブルーズ氏の通夜で、修道女は「身動きもしないで、うとうとしていた。」（ p. 379 ） 宗教に関する品々を売ようになったアルヌーは「カウンターで頭をたれ、うとうとしていた。」（ p. 395 ） アルヌー夫妻の家具類の競売時にも「下の段は、うとうとしている老人たちが占めていた。」（ p. 413 ） ノジャンの生活について、フレデリックは考える。「これほど苦しんだ（パリという）人工の世界のただ中で、彼は草木の新鮮さ、田舎での休息、無邪気な心と共に、生家ですごした眠気をもよおすような生活を恋しくおもった。」（ p. 416 ）

「感情教育」の作品中に登場する現在形は、作者の介入手段のひとつであり、「私は、自分の書いた本に作者の動き、考えが唯ひとつもないことが望みだ。」（1852年2月8日、ルイズ・コレ宛の手紙）とする客観主義に違反するようであるが、同時にフロベールは次のようにも述べている。

作者は自分の作品の中では、宇宙における神のようであなければならない。いたる所に現存し、どこにも見えないように。（1852年12月9日、ルイズ宛の手紙）

ところで、現在という「時」は、過去や未来に占領されやすい性質をもっている。似たような場面では、過去が現在を消してしまう。

「アルハンブラ」でデルマールが歌い出す。その歌詞は、モントロー号の船上でぼろ服の男が歌った歌を思い出させる。「各小節の後には長い休止があった——木々の間で鳴る風の音は、波の音に似ていた。」（ p. 73 ） あるいは、

彼らは並んで歩いていった。ロザネットは彼のうでにすがり、着物のひだ飾り

が彼の脚にまつわりついた。すると、彼はある冬の暮れ方、同じ歩道をアルヌー夫人と並んで歩いたことを思い出した。そしてこの思い出は彼の注意をすっかり奪ってしまったので、彼はもはやロザネットに気づきもしなければ、考えてもみなかった。(p.152)

現在を未来が消去してしまう場合もある。

伯父の遺産を相続してパリへ向かう馬車の中で、フレデリックは未来のことを考える。

宮殿の設計をしている建築家のように、彼は前もって自分の人生を組み立ててみた。上品なもの、すばらしいもので人生を一杯にすると、空想は空にまで昇っていった。様々のものがそこには現われ、すっかり瞑想にふけていたので、外部のものはすっかり消えうせていた。(p.101)

あるいは、アルヌーの事故死についてフレデリックが考える場面で、「夢想の激しさの中で、残りの世界は消えうせていた。」(p.317)

このような不安定な「現在」ではなく、作者の介入は、「永遠の現在」*«présent éternel»*によって行われる。

それでは、この現在形はどのような場合に登場するだろうか。

1) 直接作者の考えが述べられる場合がある。

自分が失敗した企てに、馬鹿者が成功するのを見るほど屈辱的なことはない。(p.62)

いつも意識の中には、人が流し込んだ詭弁がいくらか残っているものだ。意識からはその後味が、悪い酒をのんだ時のように消えない。(p.182)

役目としては仲介者としてしか役立たない人々がいる。彼らは橋でも渡るようにのりこえられ、後に残される。(p.242)

最もうちとけたうちあけ話においても、羞恥心か、思いやりか、同情のせいかな、いつでも限度がある。他人の中に、あるいは自分自身の中に、後をついてくるのを妨げる断崖や沼地があるのに気がつく。第一、自分は理解されることはないだ

ろうと感じる。何であろうと、正確に説明することはむずかしい。同様に、完全な結合というのも稀である。(p.331-332)

2) 「あの……」, 「例の……」といった格言めいた説明となって, 作者の観察眼のするどさが示される場合は, 作品中数知れない。一部だけ例を挙げると, ユッソネは自分こそ自分の国語を知っていると自慢した。そしてもっともすばらしい文章をけなした, 「ふざけることの好きな人間がまじめな芸術について語る時, 彼らの特徴づける, あの口やかましい厳格さ, あのアカデミックな趣味にものをいわせて。」(p.33) アルヌーは「夕食後いつものひとまわりをしてこなれば病気になったように感じる, あの連中のひとり」だった。(p.49) デロリエによれば, パリのサロンは「物質を生そのままうけとり, 100 倍も価値あるものにして返す, あの機械のようなもの」だった。(p.79) アルヌー夫人のまなざしは, 「水底まで達する, あの太陽の光のように」フレデリックの心を貫く。(p.84)

3) フロベールの個人的思い出が余りに鮮やかに浮かび上がったので, 現在形になった例もある。

ノジャンにはフロベールの親戚が住んでおり, 少年の頃よく夏休みをすごしに行った。そのノジャンについて, フロベールは次のように描写している。

ノジャンの上流で, セーヌ河は2つの支流に分かれる。一つは水車をまわし, この場所で多量の水をはき出し, 下流で本流に合流する。橋のほうからやってくると, 右手の対岸に, 芝生の土手が見える。その土手の上に白い家がたっている。左手の草原には, ポプラ並木が続いている。正面の地平線は川の曲線で限られている。川は鏡のように平らだった。(p.250, 傍線部分は現在形)

パリの描写についても同様である。フレデリックとロザネットは, シャン・ド・マルスへ行くために「コンコルド広場から, コンフェランス河岸, ビイ河岸へと進んでいった。そこからは, 庭に西洋杉が一本目につく。ロザネットは, レバノン山脈は中国にあると思こんでいた。(p.203, 傍線は現在形)

幼年時代を病院と隣合わせで送り, 妹と解剖室をのぞき込んだフロベールの個人的思い出が余りに強く, 次の場面は主人公の印象とは, ほど遠いものになっている。

スフィンクスに扮した女が突然血を吐くのを見て、フレデリックは「悲慘と絶望の世界、粗末な寝台のそばの火鉢や、革のおおいに包まれ、水道栓から出る冷水が髪を洗っているモルグの屍体を見たかのように、ぞっとした。」(p. 124, 傍線は現在形)

「それから疑念の日々が始った。胃がいれん、不眠、発熱、自己嫌悪をひきおこす思考の葛藤が。」(p. 215, 傍線は現在形) この一節は、フロベールの創作の日々を想像させる。

4) 作品を書くために、最近もよりの場所を訪れ、その鮮かな印象で現在形になったと思われる例もある。

1867年4月1日付のルイ・ブイエ宛の手紙で「風邪は治ったように思うが、重病だったので、セーヴルとクレイユにどうしても行かなければならない用事の最中に、ぶりかえしはしないかと案じている。でも甘受しなればならない、陶器工場を見なければ、これ以上原稿を先にすすめることができない。」と述べているように、クレイユに出かけたフロベールと、アルヌー夫人を追いかけたフレデリックが重なる。

橋を渡ると、小島についた。そこからは右側に修道院の廃墟が見える。川幅いっぱいにはオーズ河の第二の支流をせきとめ、水車がまわっていた、その支流に工場がせり出している。その建物の堂々たる様子にひどくおどろいた。(p. 191-92, 傍線は現在形)

家々の描写についても、「それらは2階建てで、セメントなしの石だけつんだ3段の階段がついている。時々食料品屋の鈴の音が聞こえてきた。」(p. 193)

わざわざ、フロベールがフォンテンヌブローの森へ出かけたのは、1868年8月のことである。まだ記憶に新しいこの場面の描写は、多くの現在形を含んでいる。

城の外観(「鉄格子の柵のある側から入ったので、正面全体が見えた。尖った屋根の5つの離れと、馬蹄型の階段が中庭の奥にひろがっていた。そしてその中庭の左右に一段低い建物が続いている。敷石のこけが遠くから見ると、れんがの淡褐色とまじり合っている。宮殿の全体は古いよろいのように錆色で、王公然とした冷たさ、一種武人的で、さびしい偉大さがあった。」(p. 321), 内部の飾り、絵画あ

るいは花壇の描写（「やがて彼らは花壇に下りた。それは広い長方形をしており、一目で幅ひろい黄色の径や、四角な芝生、つげの並木、ピラミッド形の水松、丈の低い草花やせまい花壇が見わたせる。まばらに生えた花は灰色の地上に点々としている。庭の先に大庭園がひろがり、長い堀割がたてに横切っている。」（p.323）あるいは森の描写（谷の風景、「ジグザグにのびている」道、「頂上では、笑顔が彼女にもどってきた。木の枝でつくった屋根の下にキャバレーのようなものを見つけたのだった。そこでは、木彫細工を売っている。彼女はレモナードをひとびんのみ、ひいらぎの杖を買った。そして丘から見える景色には目もくれず、松明をもった子供に案内させて、『盗賊の洞穴』へ入った。」（p.324）などに、その例が見られる。（傍線部分は現在形）

1869年2月2日、ジョルジス・サンド宛の手紙では「葬儀屋、パール・ラシェーズ墓地（…）へ行き、宗教用品を売っている店に沿って歩いた。」とフロベールは述べている。もちろん、ダンブルーズ氏の埋葬場面のためである。

こうした話が、ラ・ロケット通りをすぎてゆくあいだ続いた、道の両側に並んだ店先には、色ガラスの鎖とか、絵や金文字で飾った丸いものしか見えない——その様子は鍾乳石のいっぱい垂れた洞窟か、陶器屋の店に似ている。しかし墓地の鉄格子の前になると、みんな急に黙りこんだ。（p.382、傍線は現在形）

市街の道路のように舗石されている墓地の描写とか、「地面はこの場所で急な傾斜になり、下り坂になっている。足元には緑の木々の梢が見える。」（p.382-383）など、新しい記憶のもとに書かれ、作中人物の視線から、作者の視線へと移行している。

5) 自由間接話法における現在形の例もかなり見られる。

アルヌー夫人に対する色恋沙汰で悩むフレデリックをデロリエは慰める。

君のような (comme lui) 男が落胆するとは何という馬鹿げたことだ！若い時ならまだ許せるさ、(Passe encore) でもそれをすぎると、そんなことは時間の無駄というものだ。（p.70）

間接話法 (comme lui) と、直接話法の引用符をとり去ったようなこの文体は、デロリエの考えであると同時に、永遠の現在として、作者自身の考えであるとも受けとれる。

この直接話法と間接話法を混ぜ合わせたような例は他にも見られる。

クレイユにアルヌー夫人を訪ねたフレデリックは「口ごもり、言葉をさがし、結局魂の類似性について長々と述べた。空間をつらぬいて、2人の人間を近づけ、感じていることを知らせ、結びつけるようにしうる力が存在している。」(p.194, *Une force existait qui peut ...*) フロベール自身の神秘主義の表明でもある。

「アルヌー夫人はフレデリックを中庭につれていき、真面目な調子で、どのようにして土をひき、洗い、ふるいにかけるかを説明した。」(p.195, *elle expliqua (...)* comment on broie les terres, on les nettoie, on les tamise. 何ページにもわたる製陶術についての、フロベール自身の準備ノートが思い出される。)

「彼女(アルヌー夫人)が眉をひそめたので、彼(デロリエ)はやめた。

そこで一般問題に話題を変えると、夫が財産を浪費するあわれな妻に同情した。」(p.247, *il plaignit les pauvres femmes dont les époux gaspillent la fortune. ...*)

あるいは、自由間接話法に突然、現在形が登場する場合がある。

セシル嬢がマルチノンと結婚した後、ダンプルーズ夫人のサロンでの会話。

その夜、友人たちがやってきてお祝いをのべたり、同情したりした。——もう姪御さんがいないからといって、そう悲しむべきではありません。まず旅行に出発することは、新婚夫婦には非常にいいことです。後には心配事ができたり、子供が生まれてきます。(plus tard, les embarras, les enfants surviennent!) かしイタリヤは想像するのとはすっかりちがいますね。それに2人とも夢の多い年頃だから!そして新婚といえ、どんなものでも美しく見えますからね。(p.371)

ロザネットの家にやって来た執達吏はお世辞をならべたてる。

これ程かわいい人に、真剣になってくれる友人が一人もないなんて考えられるだろうか? 強制処分の競売は本当に不幸なことだ! それから立ちなをすることはできない。(On ne s'en relève jamais.) 彼はロザネットをこわがらせようとした。

このように直接話法と間接話法が混ぜあわさっている状態では、話者の決定
《Qui parle?》はあいまいにならざるを得ない。更に「ブヴァールとペキュツシ
エ」では、引用符のない直接話法と共に、引用符に入った間接話法まで登場するよ
うになる。しかし、ともあれ、現在形が突然登場するということは、その時点で、
レシを「凍結する」ようになることは明らかである。

註

- 1) 水にたとえられた動きの場合でも、しばしば中断する。

シャン・ド・マルスからの帰り、シャンゼリゼは馬車の洪水であるが、「時々、
馬車の列は、多すぎて一度に皆数列になって止まった。」(p. 208), 「それか
ら、みんなまた動き始めた。」(p. 209)

あるいは、革命中の様々な動きは、「芝居を見ているような」(p. 288)とい
う指摘で、現実から虚構の世界へ移行する。

- 2) G. Genette が指摘する「沈黙」は、夢想の世界へのがれるものであったが、
一瞬動きがとまるにすぎない場合もある。

夜明けのさわやかさと共に、陽の光がいっぱいに入ってきた。驚きの声为上
がり、それから一瞬静かになった。(p. 126, puis un silence.)

ダンブルーズ夫人は目をとじた。彼(フレデリック)は勝利が簡単なのにお
どろいてしまった。ゆっくりと揺れていた庭の大木が突然動きをとめた。動か
ない雲が空に赤い線を長くひいていた。万物が突然静止してしまったかのよう
だった。(p. 367)

- 3) 「サランボー」においては、海が青金石の舗道にたとえられていたり、鴻は銀
片でできているかのようだという描写があるが、「感情教育」においては、自然
をそのように、金属、宝石類にたとえた例は、ほとんどない。

一方、建築物の比喻は、本文における以外にも、少なからずみられる。

フレデリックが船上から見た、城の菩提樹の並木は「黒い円天井」に似ており
(p. 7), テュイルリーの後の空は「石盤色」をしている(p. 24), フォンテン
ヌブローでの、フレデリックとロザネットの散策の場面で、柵は「青銅」に似て

いる、松は「オルガンの管のように」均斉のとれた姿をしている、(p.326)
空は「円屋根のように」丸い。(p.328)あるいは「空は(…)大きな影の塊に
支えられているように見えた。」(p.50)とあるように、影さえ物質化し、空を
支えている。

このような世界では、作中人物たちは圧迫感をかんじる。

ロザネットが ≪accablement≫ を感じることは本文で述べた。どっしりした
飾り物に囲まれたダンブルーズ邸での、夫人の催すサロンは生氣なく(p.130)、
フレデリックは外へ出ると、大きく息を吸いこむ。(p.131) 圧迫され ≪accablé≫ ,
おしつぶされ ≪écrasé≫ , ≪affaîssé≫ という表現は、単なる比喻だけではなく、
実際に重みあるものが実在し、作中人物にのしかかるかのように、彼らは坐り込
み[アルヌーは「打ちひしがれた様に」≪accablé≫, 「重苦しげに」≪pesamment≫,
ベッドのはしに腰をかけた。](p.181) , あるいはフレデリックは「ベルリン
馬車の片すみにうちしおれ ≪affaîssé≫ , ミロール馬車が消えていくのを見つめ
ていた。」(p.207) , フレデリックとの決闘が決まったシジイは「夜明け頃、
それ以上我慢できず、緑色のカーペットにくずおれた。」≪s'affaîssa≫(p.228) ,
フレデリックは、我が意に反して、「余りに重い心の重みにおしつぶされ ≪s'affaîssant≫
ひざをついた。」(p.270) , ロザネットから妊娠を告げられたフレデリックは
「窓をあけ、数歩あちこち歩き、それからひじかけ椅子にたおれ込んだ ≪s'affaîssa≫」
(p.360) , 重いものを背負っていたかのように、疲れ切ってしまう。「彼は
すっかり憔悴し、おしつぶされ ≪écrasé≫ , うちたおされたような気がした。も
はや疲れ切ったという意識しかなかった。」(p.407)

参 考 文 献

本文中に引用したもの以外に、次の文献を参照した。

D.L. Desmorest, L'Expression figurée et symbolique dans
l'oeuvre de Gustave Flaubert, Slatkine reprints, Genève, 1967.
「感情教育」上, 下, 岩波文庫, 生島遼一訳